

図書館だより

第 12 号
昭和 56 年 7 月 1 日
愛媛大学附属図書館

目 次

○図書館を考える②……………	1～6	○新着参考図書リスト……………	11
○アンケート調査集計結果……………	7～9	○昭和 56 年度入学生に対する図書館利用 指導の報告……………	12
○地域資料の収集について……………	10	○お知らせ……………	12
○「あり方研」報告……………	11		

図書館を考える……②

<座談会>

附属図書館の今日的課題

ひと：学 長 野 本 尚 敬 事務局長 高 岡 盛 男
附属図書館長 星 島 一 夫
とき：昭和 56 年 3 月 23 日 ところ：学 長 室

現在、大学図書館は重大な諸問題を抱えています。この「図書館を考えるシリーズ」は、全学の教官、学生のみなさんに問題の所在を明らかにし、その認識を深めていただくことによって、積極的な御協力をえ、問題解決の方途を見出し、これを実現するために企画されたものです。今回の座談会は当初、本シリーズの冒頭を飾るものとして企画されていたのですが、学長の御都合で、本号に掲載されることになりました。本学図書館が現在、その解決をせまられている課題を「大学図書館の研究図書館の機能について」「大学図書館の機械化について」および「大学図書館と地域社会について」の三つの柱にしぼって、学長と事務局長



(前)に忌憚のないご意見を聞くことにしました。

○学生生活と図書館

館長 学長は旧制松山高校を卒業され、ついで母校で教鞭をとられたので、新制大学への移り変わ

りもよく御存知なのですが、むかしの学生と今の学生とで、図書館の利用の仕方について、何か変わっていると感じになる点がありますか。



学長 むかしの学生は、よく本も読んだし、図書館もよく利用していました。私もさかんに図書館に出入りしましたが、今の学生は、あまり本を読まないように思えます。どうしてだろう

かと考えてみると、受験勉強で面白くない本を読まされ、かえって本に厭きているのじゃないでしょうか。われわれが本を読んだ時には、いろんな本を読むことで、もの見方が変わったという経験が大きいと思うのです。自分とはもの見方のちがう本を読んで、もの見方を変えてものを考えることが出来るということを教えられて、教科書や先生の講義では分からなくても、ほかの本を読むことでよく分かるようになるということがあったのです。それと、われわれは、人間というのはどういように生きて行けば良いのか、常に悩んでいて、生き方について純文学などを読んで多感な青春時代を過したという時代だったと思うのです。

館長 学長の御専門は物理学ですが、むかしは自然科学系の学生も文学や哲学の本をよく読んだものです。私なんかは図書館に通いながら、いろいろな本との出逢いがある、自分自身の人間形成をなしたと思うのです。現在では、そういう点がどうなっているのでしょうか。単に大学で教わっていることの前習や復習のためだけに図書館を使っていることで終っているように感じられるのですが。ただ授業に関連することの勉強だけに利用するのではなく、図書館には図書・雑誌ともに豊富な資料がありますから、研究するというぐらいの姿勢で十分に活用して有意義な学生生活を送ってほしいと思います。

○大学図書館の研究図書館的機能について

館長 さて、それでは附属図書館の研究図書館的機能についてお話しただければと思います。学術審議会から昨年の1月に「今後における学術情報システムの在り方について」の答申が文部大臣に提出されました。このシステムのねらいは、我

が国の学術の振興をはかっていくためには、その基盤条件として最適な学術情報流通体制を整備しなければならないということのようです。具体的には、学術情報センターを中心とした情報の全国的なネットワークを作って、その中にそれぞれの大学図書館等が組み込まれるということで、これに遅れを取らないように大学の体制を作っていくなければいけないということが当面の大きな課題となって来ています。この場合、全国レベルの前の段階として、学内での資料の管理ということが問題になると思うのです。よく言われることですが、資料の分散と集中という問題です。特に自然科学系の雑誌は、たくさん重複して購入しているという問題があります。研究者の立場としては、研究室に図書を確保して、雑誌も自分のところに置いておくなど資料を身近に置いておきたいという気持ちよくわかります。他方、重複はムダのように思えるので何とかもっと合理化して、もっと雑誌の種類を増やしたり、本をもっと購入するなどが出来るなら、そういう方向を考えてもいいんじゃないだろうかという気がします。研究者としての立場ではなく、事務局長という立場から見てどう考えられますか。



事務局長 全学的な資料の管理という立場から見れば、効率性を良くするためにはどうしたら良いかということについての答は簡単に出来るのですけれど、その簡単に出来そうなことが出来

ないのが大学の附属図書館じゃないかと思うのです(笑)。ですから、例えば愛媛方式なりを考え出して、それを実施しようとしても根底にある先生方の意識が変らない限り実行不可能じゃないでしょうか。この問題は、研究費の分け方にも大いに関係のあることに思えるのです。どこの国立大学でも同じだと思いますが、まず全学的な管理に要する事務的な共通経費をひいて学部に分配する。学部では電気代や水道代、管理事務費などの共通経費をひいて、残りを講座に分配して、研究教育の共通経費にあてる。教官はこれの中で調査研究のための資料類を購入してゆくというパターンができています。そして、この場合研究分野が多様化していくにつれて配分の単位も細分化され

て、多くの場合教官1人当たりいくらという分け方をとっている学部も多いと思います。この中で当該教官の考え方で資料購入にいくらあてるかを決めているのが実情で、同じ研究系統の学科でさえ、目標をたててうまく効率よく運営するという事になっていない。だから、重複ということはどうしても出てくる。図書資料を、全学的に効率的に運営しようとするならば、この実情を踏まえて目標設定のための検討の場が必要だと思います。本学には、図書館委員会がありますので、そこがその任務に当ればよいと思います。現在の図書館委員会は図書館に配分された予算、例えば学生用図書費を学部ごとにどう割り当てるかというような事務的な検討の場となっているのではないかと思います。この委員会が、さきほど言いましたような本来の検討機関になれば目標設定にあたって全学の教官の合意が得られ易いと思います。やはり先生方の意識を改革してもらって、研究用の図書館の機能を上げて行くためには、文系・理系それぞれの研究費の何パーセントかは図書などの資料費に当て、その購入費の何パーセントかは図書館に割り当て、図書館の方で全体の蔵書構成や学界の動向をからみあわせて検討しながら、図書館自体で図書を購入して行くというシステムを作らない限り図書館の体質改善はむつかしいのではないかと思います。

館長 実は、いま事務局長がいわれたような方向を図書館の方でも、それとはなしに考えていたのですが……。

事務局長 それをやるには、図書館と先生方との信頼関係の問題があると思うのです。先生方はそれぞれの分野の専門家として、お互いに人格を尊重しあっておられますが図書館職員の専門性を認めていないと思えるのです。館長は全学の教官の中から選ばれる訳で図書館でただ1人の教官です。職員の中には相当数の専門職もいるのですが、総括して事務職ですから教官の頭の中には彼等は事務屋だという考え方があることはいなめない実態だと思います。こういう考え方を改めるのには教官である図書館員を配置する必要があるのではないかと思います。方法は、図書館の専門職系の中から教官に採用する道もあるだろうし、先生方の中で学術情報システムの開発に関心のある

方や図書館学を専攻したいという人を配置する方法もあると思います。図書館に専任の教官を配置するためには正式に予算要求をして実現をはかるということになりますが、現実の問題としては容易に実現しないと思いますので、さしあたりいまの大学の中でそういうことが出来ないかということを考えてみる必要があります。出来ないことはないとは思っています。けれども、なぜ、具体的な提案ができないのかという悩みを持ちつづけて来たのですが、それは学問での図書館の位置づけが明確でないためいたずらに混乱をひき起しかねないと思念されたからです。たとえば、各学部から1名づつでもよいし、関心のある先生でもよいから、図書館に勤めてもらったらいと思います。かたちは併任でもよいし、人事事務上問題があるなら机を持ってもらうだけでもよいと思います。経費と人との両方を合せて考えないと、いまのような問題の解決にはならないと思います。



館長 いま局長から率直かつ具体的な御提案をいただき、ありがたいと同時に考えさせられた訳です。一つは、予算の配分だけをやっているような形式的な図書館委員会ではなく、もっと、

これから図書館がどうあるべきかの問題を検討するような場として、教官自身が図書館について関心を深め討議するような機関にして行かねばいけないと私たちも考えないではなかったもので、今後検討してみたいと思います。もう一つの、教官で図書館に勤める専門員の制度というのも、とてもいい話で、そういう人が来れば図書館も充実するし、図書館の職員の地位の向上や、役割についての全学的な理解のしかたの改善ができるし、非常にいい提案をいただきまして、ありがとうございました。そういう点、今後考えていきます。

事務局長 事務的な処理は責任ある館長とそれを支える専門職員を含めた事務の専門家に任せるといことがなければ現状以上の進展は期待できないと思います。おかげさに言えば発想の転換、意識の改革が必要ということになりませんか。

館長 いまの局長の言われた、教官の意識の改革ということについて、学長はどう思われますか。

学長 雑誌類が分散していると言われるのです

が、私の若いころのことを考えてみますと、研究者というのは、分からないことを調べるために雑誌を見たり調べたりするよりもちょっと暇が出来てリラックスしたときに、図書室へ入って並んでいる新しい雑誌をパラパラあけて読むと、いま自分がちょうど考えていることに関連があったりすると非常に刺激されて、何もかも忘れて部屋に持ち帰って読むということが多いのです。図書は図書館へ行って読むようにしても良いですが、雑誌は暇が出来たときにパラパラあけて読むということが多いのです。図書と雑誌とは性質のちがひがあると思います。外国雑誌が高くなったり緊縮の時節柄なりで、大学で各学部共通の雑誌は一つだけ購入しようじゃないかという話が出て、愛大でも実施しているのですが、でもそうすると利用効率は非常に悪くなりますね。それと、題目だけサービスしてもらっても、梗概のようなものがなければ意味がないですね。

事務局長 管理面からこの件についてなかなか提案できなかったのは、教官はやはり資料を手もとに置いておきたいという気持が強いであろうという見方からなんです。どこら辺で妥協点を見つめるのかということじゃないのでしょうか。

学長 1年もたてば雑誌も、どんどん図書館で製本してもらって置いていただいた方が便利なのです。ただ新しい雑誌を図書館へ行って見るというのは抵抗がありますね。

館長 いまは図書館のほかに学部図書室があり、学科に図書室があり、個人の研究室に本があるという状態です。雑誌にしろ図書にしろ個々の先生方の研究室に多く分散しているということは図書館の側から言いますと、情報のネットワークを作るのに困難であり、非常に不経済だと思えるのです。今だったら、ある本が読みたくなくても個々の先生方のところに分散しているので、先生方のところへ借りに行かねばいけないという状態です。せめて学科単位ぐらいのところまでまとめれば、図書館と学科とでネットを作って、もっと資料のスムーズな流通も可能になるんじゃないかと思えます。

学長 同感ですね。学部単位の図書室が一番いいのですが、各教官の部屋に分散している図書をせめて学科単位ぐらいにまとめたいという気持ちはあります。

館長 分散と集中という問題は、分散か集中かという問題ではなく、分散と集中とをうまく組み合

わせて流通システムを通りのいいものにするということなんですね。そうなれば、研究用の図書館としての機能も高まり、情報センターとしての図書館の位置も明確になり、このことが、ひいては中央図書館の役割りを浮上させるということになるのですけれど。

学長 コピーが発達して来ましたから、必ずしも手もとにすべての資料を持たねばいけない時代でもなくなりましたね。

○大学図書館の機械化について

館長 話をすすめまして、全国的レベルでは、かなり進んで来ている図書館の機械化と合理化という問題があります。当館の場合もう少し他の大学の様子を見てからやろうということで、内部では検討はしているのですが、たまたま工学部の方から情報処理センターということで大型の電算機を導入するので図書館も乗らないかという話が出て、この機械化の問題も顕在化して来っています。もう一つは、情報検索の問題です。情報センター構想が出まして、どんどん具体化しそうなのですけれど、どうなるのだろうかという見当のつかない状態です。事務局長の立場から見通しなどお話し願えればと思うのですが。

事務局長 いま中・四国の学長会議でその問題が取りあげられているようですから、学長からお話しいただいた方がよろしいのでは。

学長 御存知のように、給与の支払いなどの事務系統の計算は四国地区では徳島大学がセンターとなっていて、学術的なセンターは広島大学に置きたいようなことで、広島大学が委員長のような恰好で中・四国の学長会議で検討を進めていますが、まだあまり会合も開いていない状態です。いま、中・四国の大学の研究用の電算機のオンラインの系列が九州大学・京都大学・大阪大学というように分かれている訳です。これは不便なんですね。まず、中・四国にひとつのセンターを置いて、中・四国の情報系列を改めることが先じゃないかと話をしています。

事務局長 愛媛大学の場合は、文部省の系統では大阪大学となっているのですが、実際は九州大学にオンラインしているなど妙なことになっています。図書関係の電算機利用は、中・四国地区では広島大学が一番進んでいるので、広島大学をセンターにして、検索するのが良いのじゃないかと思えます。本学もより大型の計算機に更新する時期

に来て、大型の計算機が欲しいから図書館も乗らないかという話とは別個に処理しないといけない問題だと思います。図書館には図書館専用の、それ相応のキャパシティを持ったシステムを作るべきじゃないかという気がします。学長会議である程度の骨格が出来れば経費の分担とか予算化について、事務局長会議と連携を取ってもらいたいと思います。それらの問題はそろそろ放っておけない事態になっていますので、案外早く進むのじゃないかと思います。

館長 早く具体化するのじゃないかという見方と、そう簡単にはいかないだろうとの両方の意見があります。財政危機がかなり続く中で、この問題は進んでいきますでしょうか。

事務局長 全体のことはわかりませんが、予算の内容を見ましても、みんな縮めて行くというのじゃなくて、やはり必要な部分は伸して、昔ながらのことをやっている箇所は切っていくらうのかというのが今後の行き方じゃないでしょうか。

館長 全体のなかで、かなり重視はされているのですか。我々が想像している以上に、案外早い機会に体制が出来ますかね。

事務局長 基本的な考え方とその方法が決まれば、そういうことになろうと思います。

館長 教官の皆さんは、まだ先のことだと思われるようです。医学部の先生方のように自然科学系の先生方は、かなり日常的に機械化に慣れている訳ですが、人文・社会科学系の先生方は、むかしながらの情報の集め方を踏襲されていて、電算機で情報を収集することなどは、かなり遠い先のことじゃないかと感じられていると思うのです。図書館としましては、電算化の全国レベルでの情報を知らせるようにして、認識を深めていただくよう努力をしていきたいと思っています。

○大学図書館と地域社会について

館長 地方大学は特に「地域の時代」ということで、地域のためになんらかの役割をもっと積極的に果さなければいけないのじゃないかと思われる。その一環として、図書館もなんらかのお役に立てるのじゃないかと思ひ、いろいろと考えています。これは、ただ地域に奉仕するということじゃなくて、むしろ相互に協力しあって行くという方がプラスになるのじゃないかと思ひます。こちらも地域に協力するし、地域からも協力しても

らうという方が、長い目でみた場合、図書館の発展にもなるし大学の発展にもなると思ひ、相互協力という観点から、図書館の内部では検討を進めています。図書館の地域への開放などという、すぐに市民に閲覧を許可して、門戸を開放するように考えやすいのだけれど、そういうことを国立大学が実施するのは難かしいのです。にもかかわらず、せっかく存在する図書館を利用していただくには、どうすれば良いかを考えている訳です。こうやったらどうだろうか、こんな方法はどうか、何かお考えになっていることはございせんか。

学長 私もあまりはっきりしないのですが、いま、隣の松山商科大学図書館が市民への開放を行っていますね、どうなのですか。

館長 あまり利用者はいないとも聞いています。局長はどう思われますか。

事務局長 図書館の場合は難かしいですね。国立大学の場合、国立の施設だから一般公開してもいいのじゃないかという気もしますが、やはり国の財産ですから無償という訳には行かないと思ひます。どういう型で利用の幅を設定するのが問題だと思うのですが、全国的にはまだそこまで行っていないようです。ただ図書館を地域に開くというのではなく、大学と地域という問題の一環として考えるべきことじゃないか、という気がしています。大学開放の一環として図書館の持っている資料の開放を考えているようなところもあるようです。例えば、岡山大学附属図書館の池田家文庫です。私もこのあいだ機会あって見せてもらいましたけれど、郷土史資料などたいしたものでした。それらの所蔵資料をデパートなどで公開したことがあると聞きました。大変よいことだと思ひますけれど、本学にはそういう資料もあまりありませんので、現在の制度の中で少しずつ開放を考えて行くということじゃないですか。まず卒業生を対象に館長の許可する特別閲覧の制度を利用して、特別閲覧券をどんどん出して行くという方法が考えられるのじゃないですか。その場合も、当館だけで推進しようとするは大変なので、関係の諸機関、教育委員会の関係各課、あるいは県立図書館・美術館・歴史民俗資料館などにも協力をしてもらおうようにすると良いですね。そして、そういう諸機関と、年に1～2回の連絡の機会を持つようにして、開放と協力を検討するようになれば良いのではないのでしょうか。

館長 いま、池田家文庫の話が出ましたが、そういう特殊コレクションを持つことが図書館の格をあげるような気がします。当館も何か特殊性を持たせたいと私達は考えています。いまやっていることがそれになるかどうか分からないのですが、地域研究のための情報を集めている訳です。愛媛大学附属図書館へ行けば、地域の研究のための資料があるということになるように、全国的な地域研究の資料も集められればと思っています。

ちょうど、愛媛大学の場合、地域社会総合研究所（地域総研）があります。いま図書館の建物は法文学部の研究室などと併合施設ですが、法文学部の建物が出来ると図書館が4階まで全部使えるようになります。そうなれば、地域総研と提携して、地域研究のためのデータを集めて地域情報センターのようなものを一室設けて、当館の新しいイメージを作ったらどうだろうか、と思う訳です。地域総研という長い歴史のある機関があるのだから、地域総研と図書館とを結びつけて、地域研究のための資料を集めたらどうだろうかと思えます。いま、県庁とは連絡をつけて、県庁の刊行物を過去にわたって網羅的に寄贈いただくことになっています。

学長 そういうのも一つの方法ですね。何も一地方だけではなく、日本じゅうの県庁から毎年出ている資料をなんとか手に入れると非常にいいですね。何も古いものからではなく、新しくても、公害とか地域開発とかの資料を集めると役に立ちます。そういった県庁資料が一括して集まっているのは、国立国会図書館ぐらいのものですから。

館長 全国の研究者の地域研究の業績をどんどん集めて行くというのもいいですね。地域資料を網羅的に集める図書館と結びつくことによって、地域総研の方も根拠地が出来るといった感じもします。

学長 そのような話なら、社会や地理の先生なんか賛成するでしょうね。全国的に集めたら、相当に利用されるでしょうね。

館長 いろいろと考えることはたくさんあるのですけれども、いざ実行するとなると、それぞれ難かしいですが、ひとつひとつやって行きたいと思えます。

○図書館職員の人材育成について

事務局長 それから、もう一つ言わせてもらえたいと思うのです。世の中はどんどん進んでいるので

すけれど、図書館はあまり変わっていないとも言われています。図書館は変わらない方がいいという意見もあります。今までのお話なんかを聞いていますと、なんとか改革して行かねばならない問題がいくつもあります。いま、館内でそれぞれに関心を持つ人が、新しい問題と取りくんでいる訳ですけれど、それにしても閉鎖的になってしまうという傾向があると思うのです。ですから、これも考えながら提案できなかったことなのですが、当館の若い人に他の大学の図書館へ行って仕事をして研修をして来てもらうのはどうだろうかと考える訳です。私は、先ほど先生の意識改革なんてことを言いましたけれど、図書館自体の意識の改革も問題ですね。今回図書館に部課制が敷かれたということは、そういう点でも意義があるのではないかと思います。2年間なりでも他館の館員と交替して他館で仕事をするという人事交流です。それが難かしければ、長期研修という手もあります。端的に例をとれば、高知県出身の人が当館に在職しているなら、2年間ほど高知大学の人と交替して、高知大学の図書館へ行って仕事をするという交流もあります。せまい人事交流でも、ひろい人事交流でも良いから、窮屈に考えるのじゃなくてこういう交流なら、相当の館からも来てくれるし行けるのじゃないかと思えます。それから、機械化をするにしても、機械化によって人が浮くという考えは逆なので、機械化する段階には2倍とは言わないまでも、いま以上の人数はいることになります。実際にどのようにして機械化を進めるかとなると、経費と人員の問題があり、大学の中に図書館をどのように位置づけるかを解決しなければいけないと思えます。人員の点など、学部から1名づつ出してもらおうと、まったくさしあたりの問題は解決される訳です。もっと前に言えば良かったのですけれど、部課制が出来、組織も大きくなりました時点で、学部に働きかけて、よく話し合ってくださいたいと思えます。

学長 学部によって、事務職員が多いところと少ないところがありますからね。

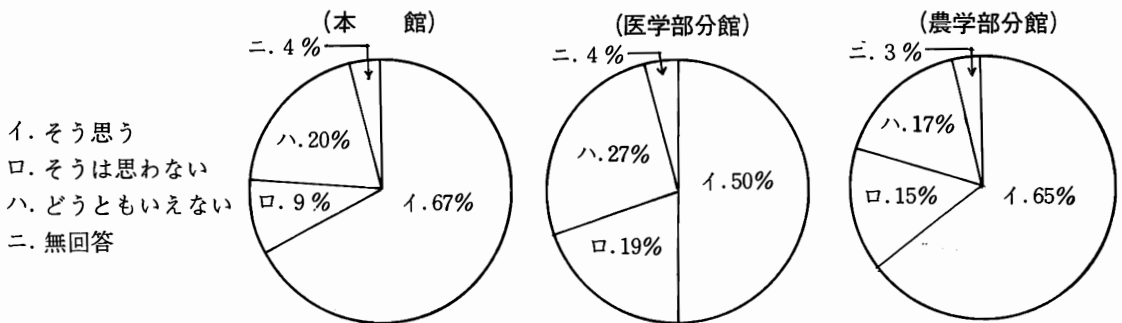
館長 事務局長から結論じみたことを、おっしゃっていただきました。実は、図書館自体がしっかりしなければいけないというのが本当の出発点なのです。いくらなんだかんだと言っても、図書館の基礎がちゃんとして、職員がしっかりしていないといけないと思えます。その点、今後の我々の重大な課題だとうけとめて行きたいと思えます。

アンケート調査票集計結果

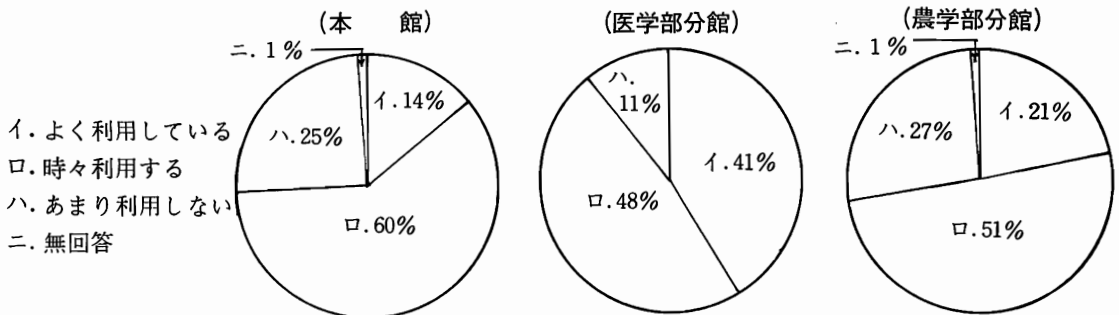
去る4月18日、本学附属図書館（本館、医学部分館、農学部分館）の今後の運営の参考にさせていただくため、助手以上の研究者を対象とした図書館利用に関するアンケート調査を実施しましたところ、多数の先生方の御協力をいただきました。ここにお礼を申し上げますとともに集計結果（質問事項及びその回収率等）をとりあえず御報告致します。

なお、このアンケートによって御指摘いただいたことがら等についての図書館の見解、対応の詳細については次号で御報告する予定です。

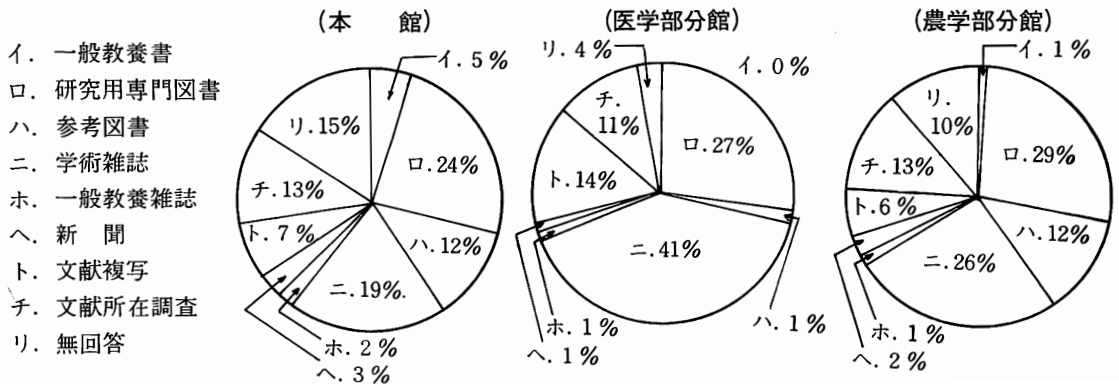
質問1. 図書を注文されてから、それがお手元にとどくまで時間がかかりすぎるという意見がありますが、どう思われますか



質問2. 図書館に直接足を運び、利用されていますか

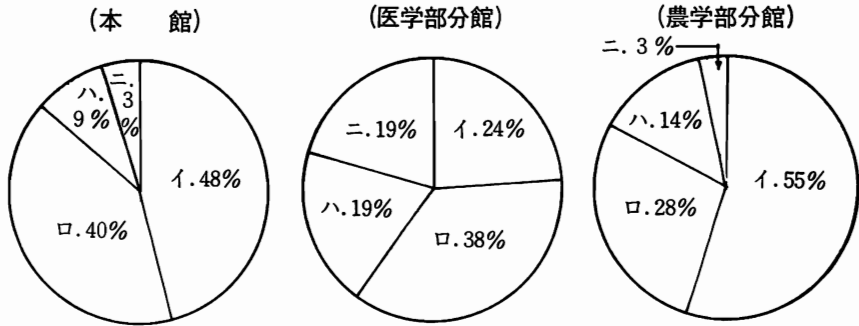


質問3. 図書館にこられて、よく利用されているのは何でしょうか



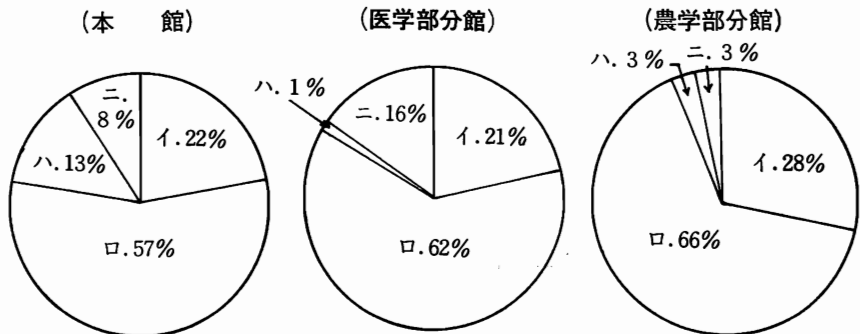
質問4. 図書館をあまり利用されていない方にお聞きますが、その主な理由は次のうちどれですか

- イ. 研究室および学科の図書室の資料で足りる
- ロ. 現在の図書館では満足する情報が得られない
- ハ. 個人のネットワークでほとんどの情報が得られる
- ニ. その他



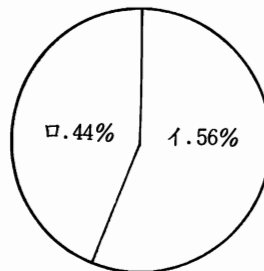
質問5. 学生用図書を選択する際どのような図書を中心に選びますか

- イ. 研究用専門書
- ロ. 学習用専門書
- ハ. 一般教養書
- ニ. 無回答



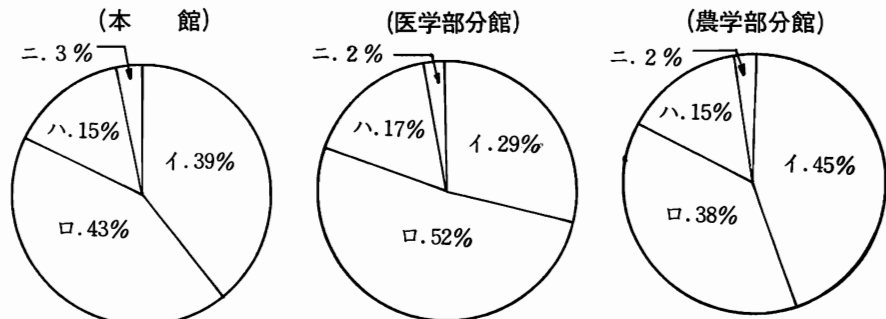
質問6. 教養部の先生にお聞きますが、指定図書を選択する際、どのようにされていますか

- イ. 授業に関連して選んでいる
- ロ. 授業との関連にはあまりこだわらずに選んでいる

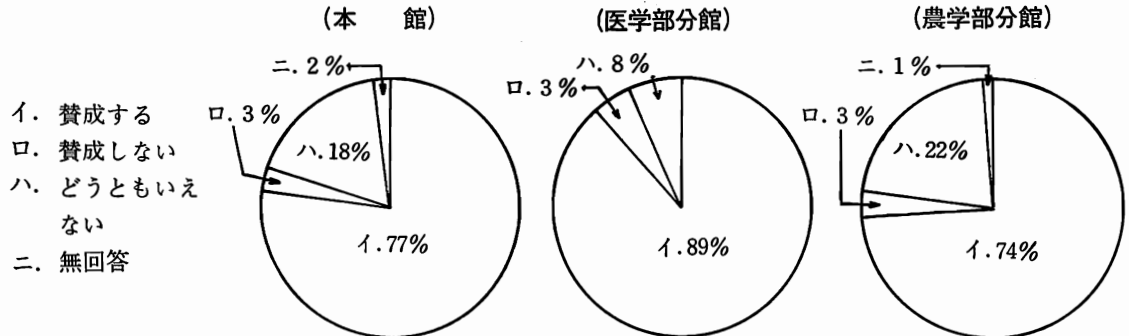


質問7. 学内に分散している学術雑誌を図書館に集中すれば、共同利用、重複雑誌の淘汰に役立ち、研究費の節減等のメリットがあるといわれていますが、この方式を採用することについてどう思われますか

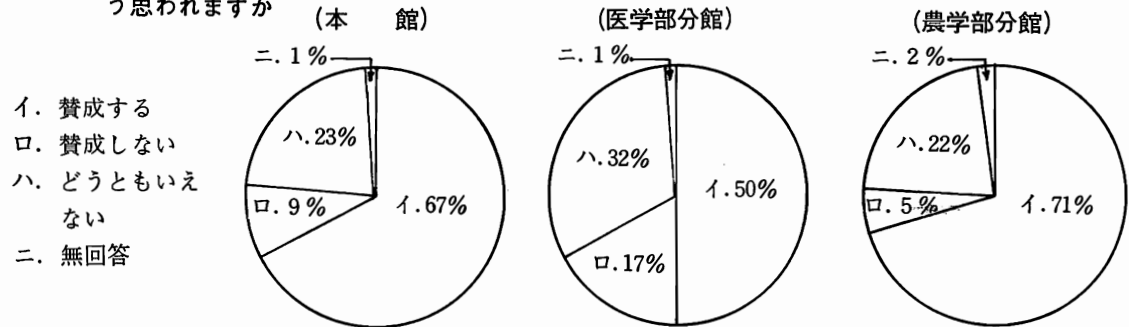
- イ. 賛成する
- ロ. 賛成しない
- ハ. よくわからない
- ニ. 方法による及び無回答



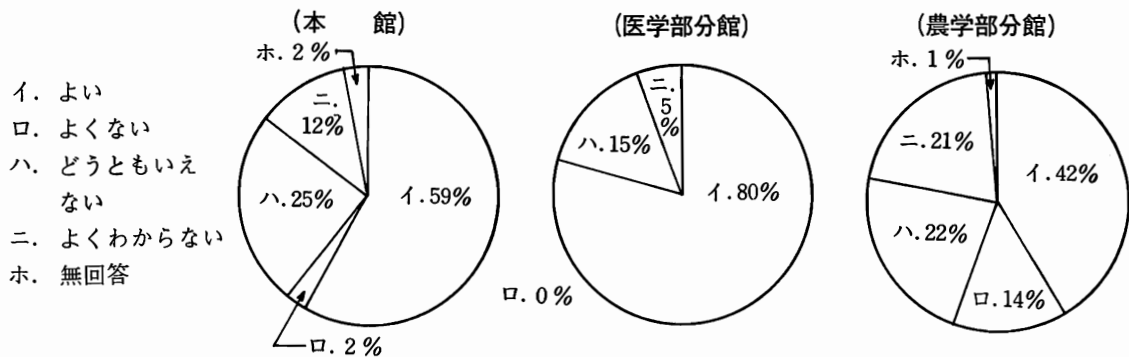
質問8. 公衆回線(電話)を用いたオンライン方式により, 研究室に必要な学術情報を即時に検索できる端末機を図書館に設置してサービスの向上をはかることについてどのように思われますか



質問9. 開かれた大学として, 図書館でも地域社会に対するサービスを検討中ですが, これについてどう思われますか



質問10. 図書館職員の対応ぶりについてどう思われますか



回収率

学部	回収率	学部	回収率
保健管理センター	50%	工学部	47%
法文学部	58%	農学部	88%
教育学部	38%	教養部	39%
理学部	72%		
医学部	55%	平均	56%

地域資料の収集について

図書館では、地域研究に対する資料的援助を積極的に進める目的から、県下の自治体及び公共の機関が刊行している地域資料を調査し、収集をしておりますが、このほど県下各市町村の格別のご厚意により、下記のとおり関係資料をご寄贈いただきました。（他に市町村勢要覧・地方文化財・振興計画・統計関係等多数のご寄贈がありました。が、今回の掲載は市町村誌のみといたしました。）

同資料は図書館1階開架室・参考図書コーナーの一角に備え付けましたので、精々ご利用下さい。

なお、今後も引き続き同資料充実のため、有益な資料及び情報をご提供下さいますようお願い申し上げます。（閲覧課参考調査係）

資 料 名（順序は東予・中予・南予の順）

川之江市史 川之江市 昭35

伊予三島市の歴史と伝説 伊予三島市 昭51

郷土史年表伊予三島市 100年のあゆみ

伊予三島市 昭48

別子山村史 別子村 和56

別子鉱山鉄道略史 別子銅山記念館 昭53

新居浜市史 新居浜市 昭55

西条市誌 西条市 昭41

西条市誌編纂餘録 久門範政 昭47

庄内村誌 庄内公民館 昭31

周布村誌 周布公民館 昭53

田野村誌 丹原町田野支所 昭32

今治の歴史散歩 今治市 昭56

愛媛県上浦町誌 上浦町 昭49

伯方島誌 伯方町立北浦小学校 昭42

伊予岩城島の歴史 岩城村 昭45

続伊予岩城島の歴史 岩城村 昭46

弓削町史考 弓削町 昭49

郷土誌（写） 宮窪町 昭55

なみかた誌 波方町 昭43

大西町誌 大西町 昭52

菊間町誌 菊間町 昭54

北条市誌 北条市 昭56

松山市誌 松山市 昭37

松山市史料集 第一巻 松山市 昭55

松山城 増補版 松山市 昭54

道後温泉 松山市 昭49

松山市戦災復興誌 松山市 昭44

川内町誌 川内町 昭36

続川内町誌 川内町 昭43

中島町誌 中島町 昭43

中島町誌料集 中島町 昭50

松前町誌 松前町 昭54

砥部町誌 砥部町 昭53

双海町誌 双海町 昭46

久万町誌 久万町 昭43

久万町誌資料集 久万町 昭44

面河村誌 面河村 昭55

美川村二十年誌 美川村 昭50

大洲市誌 大洲市誌編纂会 昭47

長浜町誌 長浜町 昭50

五十崎町誌 五十崎町 昭46

肱川町誌 肱川公民館 昭52

河辺村誌 河辺村公民館 昭53

八幡浜市誌 八幡浜市誌編纂会 昭50

保内町誌 保内町 昭48

伊方町誌 伊方町 昭43

三瓶郷土史 第一編 三瓶町 昭40

三瓶郷土史 第二編 三瓶町 昭42

明浜町史年表 明浜町 昭50

明浜町史年表 補遺編 明浜町 昭50

宇和町誌 宇和町 昭51

中筋郷土誌 野村町 昭54

貝吹村誌 野村町 昭39

宇和島市誌 宇和島市 昭49

吉田町誌 上巻 吉田町 昭46

吉田町誌 下巻 吉田町 昭51

吉田藩維新史年表 楠本長一 昭49

三間町誌 三間町 昭39

松野町誌 松野町 昭49

日吉村誌 日吉村 昭43

津島町誌 津島町 昭50

内海村史 上巻 内海村 昭28

内海村史 下巻 内海村 昭28

南宇和史と民俗 本田南城 昭50

一本松町史 一本松町 昭54

「あり方研」報告

昨年、附属図書館内において「大学附属図書館のあり方を研究する会」(略称「あり方研」)が発足しましたことは、これまでの「図書館だより」で御存知かと存じます。簡単に報告させていただきます。最初に「地域社会における大学附属図書館」を研究テーマに選び、昨年の7月23日の第1回目の集りから同年9月4日まで6回にわたって地域資料の収集、地域との相互協力、地域への協力と附属図書館独自の仕事との両立について等、議論を重ねました。そのうち、「あり方研」での議論を発展させて、これまで同じ地域にありながら交流の少なかった県立図書館や教育委員会とも話し合いの機会を持ち、資料収集機関としての図書館機能を、地域社会全体として充実させつつあります。本年も、地域社会との問題のみならず、大学附属図書館のあり方を全面的に検討して行く機関として「あり方研」を発展させて行きたいと考えています。報告と同時に全学の御支援をお願いいたします。

新着参考図書リスト

- World guide to Libraries. 5th ed. K. G. Saur Verlag, 1980.
- 出版関係文献要覧 明治18年—昭和19年 上巻 論文編 彌吉光長(等)編 日外アソシエーツ 1981
- Books on demand, Vol. 1-3. UMI. 1980.
- 国防・軍事に関する27年間の雑誌文献目録 昭和23年—昭和49年 日外アソシエーツ 1981
- 参考図書所在目録 一和文編— 日本私立大学協会 1968
- World guide to abbreviations of organizations. 6th ed. Leonard Hill, 1981.
- 日本史文献年鑑 1981 柏書房 1981
- 古文書用字用語大辞典 柏書房 1980
- 日本地名語源事典 吉田茂樹著 新人物往来社 1981
- 日本地名索引 上・下 金井弘夫編 アボック社 1981
- 地名関係文献解題事典 鏡味明克(等)編著 同朋舎 1981
- 地域問題事典 学陽書房 1980
- Black's law dictionary. West Pub, 1979.
- ドイツ法律用語辞典 山田晟編 大学書林 1981
- 法学文献総目録 1巻(1916)—3巻(1944) 日本評論社 1979—80
- 日本経済事典 日本経済新聞社 1981
- Bibliography of the classical economics, Vol. 1-5, by Keitaro Amano. 巖南堂書店 1980
- 統計情報総索引 昭和56年版 総理府統計局 1981
- 日本歳事辞典 まつりと行事 儀礼文化研究所編 大学教育社 1981
- 民間信仰辞典 桜井徳太郎編 東京堂 1980
- 岩波理化学辞典 第3版増補版 岩波書店 1981
- 化学辞典 志田正二(等)編 森北出版 1981
- 地学事典 増補改訂版 平凡社 1981
- 日本産魚名大辞典 日本魚類学会編 三省堂 1981
- 鳥類原色大図説 新版 第1巻—第3巻 黒田長禮著 講談社 1980
- 新図解医学英語辞典 奥田邦雄 高原満男著 メジカルビュー社 1981
- 和・英・独・ラ 対照カルテ用語 金芳堂 1981
- French-English and English-French dictionary of technical terms and phrases, Vol. 1-2, by J. O. Kettridge. Routledge & Kegan Paul, 1980.
- 電子電気図・記号便覧 片岡徳昌編著 開発社 1980
- 新水産ハンドブック 川島利兵衛(等)編 講談社 1981
- 類語新辞典 大野晋 浜西正人著 角川書店 1981
- 研究社新英和大辞典 第5版 研究社 1980
- 米英俗語辞典 ドナルド・キーン 藤井章雄編 朝日出版社 1981
- 和露辞典 佐藤勇著 講談社 1981
- Articles on twentieth century literature; an annotated bibliography, 1954 to 1970, Vol. 1-7, by David E. Pownall. Kraus-Thomson Organization, 1973-80.
- フランス文学研究文献要覧 1945—1978(戦後編) 1-4巻 杉捷夫(等)編 日外アソシエーツ 1981

昭和56年度入学生に対する図書館 利用指導の報告

図書館では本年度の入学生に対し、下記の要領
で実施し、前年度以上の出席者がありました。

実施期日：昭和56年4月9日（木）

利用指導の内容：

- a 図書館利用案内（スライド映写）
- b 図書館見学

学部別時間割と出席者

学 部	実 施 時 間	対象者	出席者	出席率
法文学部	9:00~10:00	289人	230人	79.5%
教育学部	9:30~10:30	368	327	88.8
理 学 部 医 学 部	10:00~11:00	290	231	79.6
工 学 部	10:30~11:30	396	300	75.7
農 学 部	11:00~12:00	170	77	45.2
法文学部夜 間主コース	18:00~19:00	119	81	68.0
計		1,632	1,246	76.3

お 知 ら せ

○ 夏季休業中の長期貸出について

昭和56年度夏季休業中における長期貸出を下記
のとおり行います。

- 貸出手続期間 56年7月1日～7月10日
- 貸出冊数 開架図書5冊、指定図書3冊、
書庫内図書5冊以内
- 返却期限日 56年9月12日まで

○ 他大学図書館等の利用について

夏季休業中郷里の大学図書館の利用を希望され
る方、または調査研究のため、他の図書館を利用
したい方のために、図書館相互利用の方法により、
希望する図書館で所蔵している図書資料を閲覧・
借受・または文献のコピーの提供を受けることが
出来ます。

その場合、学生証（身分証明書）と本学図書館
長の紹介状が必要です。

紹介状の交付手続きは、参考調査係で取り扱い

をしておりますから、ご希望の方は早目にお申し
出下さい。

○ 視聴覚室の新設について

このたび、附属図書館4階北側に、面積155㎡
座席数約80席の視聴覚室ができました。

備えている機器は次のとおりです。

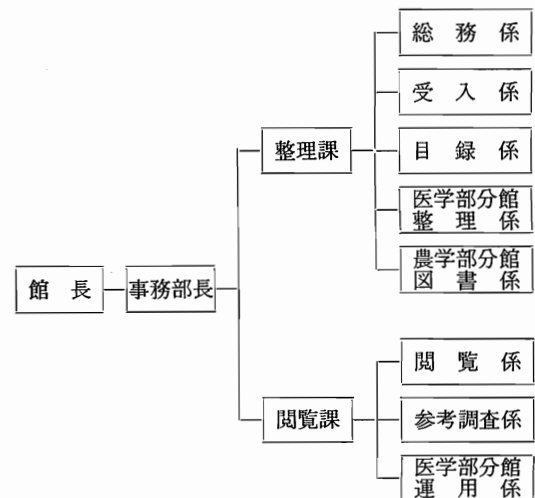
- 16ミリ映写機1台（エルモ16-CL）
- スライド映写機1台（エルモA S3000A）
- ステレオ装置一式
- ビデオ装置一式（VHS）
- オーバーヘッドプロジェクター一式

ご利用になる方は、使用の1週間前までに、附
属図書館整理課総務係へお申し出ください。

○ 図書館の機構改革について

昭和56年4月1日から附属図書館は部課制とな
り、事務部長に小河 清（附属図書館事務長）整
理課長に山本晴康（経理部主計課長補佐）閲覧課
長に平川友視（九州大学附属図書館整理課長補佐）
が就任しました。

附属図書館の機構図



愛媛大学附属図書館報「図書館だより」

第12号 昭和56年7月1日発行

発行 愛媛大学附属図書館

松山市文京町3番

Tel 0899-24-7111